

『東方』二九〇号より

魂の対話の記録

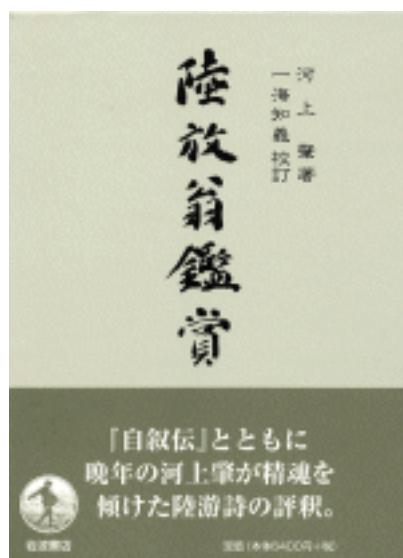
宇野 直人(共立女子大学)

本書は『自叙伝』と並ぶ河上肇博士晩年の労作であるが、単に陸游に関する秀れた参考書であるにとどまらず、言わば時空を隔てた二人の偉人の魂が対話を交して高度の結実を見せる、その現場に居合せるような、すばらしい感銘を与えられる名著である。筆者自身、本書を精読することによって、陸游、ひいては漢詩を読解する上での種々の問題について多大の知見を授かるとともに、自分自身の研究意欲を大いに鼓舞された。そして、そのような本書の迫力、感化力がいったい何に起因するのか、少しでも知りたいと思ひ、河上博士の『自叙伝』(岩波文庫、全五冊)『河上肇評論集』(岩波文庫)、また本書の校訂に当られた一海知義教授による『河上肇と中国の詩人たち』(筑摩書房)『河上肇そして中国』(岩波書店)『河上肇詩注』(岩波新書)『一海知義の漢詩道場』(岩波書店)を通読した。考えるところはいろいろあつたが、それらについては紙幅の点で他の機会にゆずらざるを得ない。ここでは、本書が筆者をそのような行動に駆り立てずにおかない強烈な力をもっていたというこののみ報告し、以下、本書の特色・意義についての所見を述べることによつて、書評の任を果すこととしたい。本書は(放翁鑑賞 その二)から(その七)までの七章に分かれている。執筆の時期は昭和十六年から十八年にわたるが、順を逐つて書かれたわけではなく、執筆順に並べ替えれば(その五)↓(その三)↓(その六)↓(その七)↓(その五(続))↓(その四)↓(その一)↓(その二)となる。

河上肇著／一海知義校訂

『陸放翁鑑賞』

A5判・五四二頁・岩波書店・六、七二〇円



これらは書名の簡明さがもたらす予想に反し、複合的・立体的に構成されている。まず(その一)から(その四)までは、陸游の晩年、六十〜八十代の詩を取り上げ、原詩・書下し文とともに懇切な注釈を施したものである(僅かの例外を除き、通釈は附せられていない)。つづく(その五)は陸游の詞四十首につき、原詞・書下し文・注釈を加えたもの。当時のわが国における詞の知名度の低さを考慮してであろうか、博士は本章の冒頭に特に(はしがき)を設け、詞の由来や特色について、森槐南『作詩法講話』や薛礪若『宋詞通論』を引用しつつ解説を加える。また各作品の注釈欄でも、詞の構造・押韻・字眼などにつきていねいに説明している。博士は訓読された詞の調子について格別の感興を覚えたと思え、(はしがき)の末尾は「之を日本読みにする吾々にとつては、……むしろ長短句のまちまちになつて居るところに、却て一種の清新味を感じるのである。まあ

▼『東方』290号より
一 魂の対話の記録
▲ 宇野 直人

読んで御覧なさい」と結ばれている(四二七頁)。

〈その六〉は訳詩集とも言うべきもので、陸游の五七言絶句十三首を選んで新体詩ふうの文語和訳をつけ、時に補説を加え、さらに附録の形で唐・宋・明の詩人六名の五言絶句、計七首の和訳を収めている。博士は森外にたいへん傾倒していたとされ(前掲『河上肇と中国の詩人たち』六一、二頁)、そのことは『自叙伝』中に外が七たび引用されていることにも窺われるが、或いは本章は外らの訳詩集『於母影』に倣ったものであろうか。

そして最後の〈その七〉は「放翁詩話三十章」という副題を有し、『渭南文集』『老学庵筆記』から詩に関する記事三十章を搜集、それらの書下し文を収め、博士自身の補説を附したものである。

このように、本書は陸游の文学と人物とに多方面から光を当て、その全体像を言わば多面的統一体として捉えようとしたものである。博士は本書について「弁証法的にやつてみた」と語られた由(前掲『河上肇そして中国』二五頁)であるが、その「弁証法」(*dialektik*; *ツヴァイ* *Dealektik*)がマルクス・エンゲルス流の意味であるならば、それは本書をこのように多面的に構成した方法意識を指すとも考えられよう。

本書執筆の姿勢は、真摯周到と言うに尽きる。まず作品の選定については博士自身、

選集によつて人の詩を評価するのは、世間の噂話によつて人の品格を論ずるが如きものである。……本当に一定の詩人を知らうと思へば、その全集によらなければならぬ……。

(本書三二五頁)

と述べるのとおり、みずから汲古閣本『陸放翁全集』を熟読し、秀作と判断した作品を収録している。注釈も洵に正統

▶ トップページにもどる

的な手順を踏んでおり、底本の他に各種の選集(『箋註劍南詩鈔』『陸放翁詩鈔注』『放翁先生詩鈔』『宋詩百一鈔』『陸游好句集』など)を参看して校勘を行い、語句の意味、出典、用例、故事を丹念に説き、詩の理解に必要な押韻法や対句法、虚字の働きに言及している。とりわけ目立つのは、或る詩句を解釈するに当り、「放翁の他の詩に」として陸游の他の作例を引いて参考に供しているケースが非常にしばしば見られることである。その傾向は時として注釈の域を踏み出し、小論文の形をなすに至っている。たとえば「沈痼」(「持病」という語が出て来れば、陸游の他の詩を縦横に引いて彼の病歴を論じ(一四六頁)、「海棠」が出て来れば、彼が海棠の花を詠じた数々の詩を引いてその偏愛のさまを明らかにしている(四四五頁)。こうしたことは、博士が陸游の詩をまさしく自家薬籠中の物としていたとの感を深くさせずにはいない。或いは博士は、陸游の詩句の索引のようなものを自作しておられたのだろうか。それが京都府立総合資料館に遺されているのならば、ぜひ拝見したいものである。

以上の紹介だけでも、本書には博士晩年の並々ならぬ精魂が傾注されていることが感得されようが、しかし本書の面目は、右のような正統的枠組の中で展開される個性的手法にこそ存在する。その個性は次の三点にまとめることができる。

第一に、或る詩の詩想の流れ、詩的文脈をパラフレーズして注記している例が少なくないこと。たとえば五絶「摩閣黎の二画に題す二首」の「其の二」では、

家中の人々が、こんな大雪になつたが、おちいさんは、さぞ帰るのに困つてゐるだらう、と心配してゐたところ、無事に帰つて来たので、家中の人々が安心して喜び、翁

を炉のはたに坐らせて、さぞ寒かつたらう、さあ之を食べなさい、と云つて、炉火で焼いた薯のホカホカと煙の立つのを出して呉れてゐる。これは想像であらう。

(二六六頁)

と、詩人が絵画に触発されて心中に繰り広げたイメージの世界にまで踏み込んで述べている。これなどは題面詩における想像力の働きの方とその表現にかかわる、興味深い指摘である。また五律「六月十四日、微雨極めて涼し」では、

……先づ雲生じて空が曇り、次いで雨がふり、雨がふりやんだあと、土の香がするにて、措辞はずつと時間的の順序を踏んである。

(二七六頁)

と述べるが、これは本詩が律詩としてはややユニークな流動的作風であることをあやまたず看取し、そのことへの注意を促そうとしたものであらう。

以上のような解説が、陸游の詩、ないし漢詩一般に対する理解を格段に深めてくれることは言うまでもない。

第二に、或る詩の一首全体について論評する場合、往々自己の体験や人生観を交えていることである。たとえば、
○歎息す人の月明を共にするなきを。私も今、京のかたほとりに蟄居して風月を楽しみながら、同じ境遇、同じ趣味の友人なきことを、いつも唯だ一つの不足に感じてゐる。放翁の詩にかうした意味の句はよく出て来るが、事実、彼も亦た屢々さうした思ひに耽つたものと察する。

(七絶「舟を繋ぐ二首」其の一―二三三頁)

○……才不才間未必全。利巧な人が実は馬鹿で、馬鹿に見えるてゐる人が却て賢い例は、世間に少くない。私は常にその感を抱いてゐるので、特に放翁の此の句を好む。

(七絶「秋思十首」其二―三七六頁)

○……世の中には、恰も才分の大に伸びようとする二十、

▶ トップページにもどる

三十の時期に、時勢に圧せられ、不幸にも志を伸ばし得ず、徒に才を抱いて老い行くものが少くない。……さうした人々が、すでに老境に入つてから時勢の好転に遭遇した時、もし此の詞を読まば、恐らく多少の感慨に耽るを禁じ得ないであらう。

(小令「豆葉黃」―四三九頁)

本書全体にわたつてこのような叙述はかなり多いのであるが、前述のように博士自身が本書を「弁証法的にやつてみた」と言う、その「弁証法」が古代ギリシャ流の意味であるとするれば、それはここにこそ当てはまるものであり、それがまた本書の「陸游との対話」という印象をひとときわ強めているのである。

第三に、文中しばしば日本の漢詩や短歌、新体詩などを引用し比較しながら論を進めていること。村上仏山(三〇頁)、上田敏(一三〇頁)、西行(一三三頁)、若山牧水(三五四頁)、斎藤茂吉(三三四、四一四、四三七頁)らが登場する。また(その七)では、陸游の詩論と類縁性をもつ例として、ゴルキーの『文学論』が引用されている(四八九、四九〇頁)。

このように、国や時代を異にする文学者・文学作品を引用しつつ論述することは中国人の著作にはよく見られ、アリストテレス、シェイクスピア、ゲーテ、ショウペンハウエルなどの名をしじゅう目にするのであるが、わが国の、少なくとも中国文学関係の著作においては稀である。このことは、わが国の中国文学研究が文学論として広がりや深さとも得ない原因を端的に示しているとも言えよう。この意味でも、本書のこの姿勢は大いに学ぶべきであると考ええる。

さて前述のとおり、本書は(その六)を除き、原則として詩の通釈を附していない。このことは一見、本書に取り

つきにくい印象を与えるかも知れない。が、本書全体に、右に述べたような懇切な注釈が施されている以上、むしろそれらと書下し文とを照合して読んでゆく方が、原詩の詩想・詩情に近づく早道であるように思われる。生半可な通釈はかえって訳者の理解力・表現力のレヴェルにまで原詩の水準を下げてしまい、読者の理解を制限・掣肘する方に作用するからである。その点でも本書の、書下し文と注釈のみで漢詩を解説する方法はぜひ再認識されて然るべきであろう（二海先生の『河上肇詩注』でもこの方法が取られている）。ちなみに、詩の訓読とその意義については、河上博士の「閑人詩話」（『河上肇評論集』所収）に卓見がある（特に二六六～二七六頁）。

注釈（訳注）という仕事は、わが国ではとくく学術論文の執筆よりも低く見られがちであるが、作品に対する理解力・共感能力が鋭く問われる点では、実は注釈の方が上であり、慎重に取り組むべきものである。また、蕭士贇の李白詩注、錢謙益の杜甫詩注、査慎行の蘇軾詩注などに見られるように、中国では〈注釈〉に己れの存在意義を賭け、自己の主張を託する伝統があつたことも思い合される。単に辞書の訓詁を並べ、書下し文の口語化と大差ない通釈を施す体の姿勢は、〈注釈〉の本質とも、その中国的伝統とも程遠いものと言わざるを得ない。その点、本書は〈注釈〉の中国的伝統を〈弁証法〉という方法を導入することによって新たな形で具現したものであり、しかも博士の見識と感覚の卓越によって、注釈の作業を原作者との対話の記録という域にまで引上げる成果を挙げている。本書の意義は、今後も末永く不変であるに違いない。

（二月三十日、河上肇博士の祥月命日に書し了る）

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる